

俗ラテン語における完了幹 -v- の脱落についての 生理音声学的解釈

磯 野 暢 祐

(文化システム専攻言語科学領域担当)

I. はじめに

俗ラテン語から今日のロマンス諸言語へと移り変わって行く歴史的過程においては、語彙の面においても統辞論においても多くの変化が見られたのは当然のことだが、音声の面においても同様に、地域的にも時期的にも多様で複雑な変化が起こった。あるものは今日のフランス語の話されている地域にのみ起こり、またあるものはイベリア半島でのみ起こり、さらにあるものはローマ帝国の東の僻地で起こったものもある。あるいは、さらにごく限られた地域でのみ起こった変化もある。また、東方ロマンス諸言語に共通の変化があれば、西のロマンス諸言語のみに見られる変化もある。まさに、このような地域的に異なる音声変化が、今日の多様なロマンス語へと分化していった大きな原因のひとつであろう。しかし、数多くの音声変化の中には古典期以前のラテン語から引き継いだ音声変化が、数世紀の時間の隔たりを経て、帝政期の俗ラテン語の時期になって完成された汎ロマンス的な変化もある。例えば、幾つかあるラテン語の完了幹の一つに -v- を持つものがあるが、古典期以前のラテン語や古典期のラテン語において既に、特定の動詞の特定の人称においては、この -v- は脱落していた。そして、紀元後4世紀頃までの俗ラテン語の時期において、他の人称や他の動詞にもこの音声変化が広がっていったと考えられている。本論では、この後者の音声変化について、Matte が主張する純粋に音声学的な立場、彼の用語法で言う *mode phonétique* によって解釈することを試みる。すなわち、俗ラテン語からロマンス諸言語への音声変化の大きな流れの中において、個々の音声変化が独立してそれぞれ

無関係に起こるように見えても、そのきっかけになるものは、それぞれの音声変化を起こす、百年から数世紀の時間を単位とする、ある言語が持っている生理音声学的な傾向によって説明できるという主張によって、この音声変化を見て行きたい。

なお、音声表記はフランス語歴史音声学で最も広く用いられる Bourciez の表記法による。必要がある場合には国際音声字母も用いるが、そのさいは [] 内に記入する。また、語源になるラテン語は全大文字で表記する。

II. 1. 古典ラテン語の完了形

古典ラテン語の動詞体系を見ると、現在幹をもとにして変化形が作られるものと、完了幹をもとにして変化形が作られるものがある。そして、直説法には三つの時制、接続法には二つの時制があり、以下のような整然とした体系になっている。ただし、ここでは能動相のみを問題にする。受動相においては、未完了をあらわすすべての時制では、能動相と同じように現在幹をもとにして変化形が作られるのに対して、完了時制では完了幹を用いないからである。能動相で完了幹を用いるところを、迂言的表現法によって、完了分詞に *esse* の活用形を付けてあらわすからである。

	直説法	接続法
現在幹	現在	現在
	未完了過去	未完了過去
	未来	
完了幹	完了	完了
	過去完了	過去完了
	未来完了	

このように、完了幹をもとにして作られる動詞活用形は、ラテン語の動詞体系においては、現在幹と同じように高い頻度で出現するものである。そして、多くの場合、完了幹は現在幹とは形態的にははっきりと異なったものになっている。また、その完了幹に続いて出てくる活用語尾も、現在幹に付くものとは明確に別のタイプに属するものである。このように形態的に大きく異なる特徴があることにより、これら二つの体系が維持され、その結果、したがって音声学的にも聴覚的に認識されやすいかたちで、完了の体系と、未完了の体系が整然と機能していたものと思われる。

しかし、この完了幹の作り方は、単一の方法によるのではなかった。古典ラテン語の時期には、以下に見るように、歴史的に由来の異なる5つの種類による完了幹の作り方が存在していた。以下に Ernout にしたがって概観してみよう⁽¹⁾。

1. 畳音によるもの。これは動詞幹の頭に語頭の子音を重ねて、それに母音（多くの場合には弱化した母音）を付け加えるもの。

DO > DEDI,
MORDEO > MOMORDI,
CADO > CECIDI

2. 母音交替によるもの。多くの場合、動詞幹の母音が変わるだけでなく、その母音が長音化する。また、長音化のみで母音は変わらないものもある。

SEDEO > SEDI,
AGO > EGI,
FACIO > FECI

3. -si をつけるもの。動詞幹に -si を加える。

RIDEO > RISI,
DICO > DIXI,
SCRIBO > SCRIPSI

4. -vi をつけるもの。動詞幹に -vi を加える。

AMO > AMAVI,
DELEO > DELEVI,
AUDIO > AUDIVI

5. -ui をつけるもの。動詞幹に -ui を加える。これは上記4のものが音声変化した結果によるものと考えられる。

MONEO > MONUI,
COLO > COLUI,
APERIO > APERUI

これら上記のうちで、最初の二つは本来のインド・ヨーロッパ語族の諸言語に共通の方法による完了幹の作り方である。3の方法はアオリストの作り方に由来すると言われている⁽²⁾。ギリシャ語においても、アオリストはこの子音を用いて作られることを見れば分かるように、インド・ヨーロッパ語族に共通の方法によるものである。ただ最初の二つと違うのは、ラテン語ではアオリストではなく完了幹を作ることである。古典ラテン語では既に失われてしまったアオリストという時制が、このような形で完了幹の中に名残をとどめているわけである。このことは、古典ラテン語の完了時制はアオリストの用法をも合わせ持っていることを考えれば納得できるだろう。4の方法はラテン語に特徴的な完了幹であるが、インド・ヨーロッパ比較言語学によると、ヴェーダの言語やヒッタイト語などにも、散発的に同様な例（完了をあらわす -w- の音）が見られるという⁽³⁾。なお、最後の二つのタイプ、4と5は本質的には同じものと見なしてよい。5は4が音声変化してできたものと考えられるからである。

II. 2. その後の変化

次に以上のような古典ラテン語の完了幹を用いる時制が、俗ラテン語やロマンス諸語において、その後どのように変化して行ったかを見てみよう。

(1) Ernout, A. § 267～

(2) Ernout, A. § 285

(3) Meillet, A. p.17

まず直説法においては、完了のみが残った。フランス語を初めとする多くのロマンス諸語では単純過去（イタリア語では遠過去、スペイン語では点過去などと呼び方は異なる）として残っている。しかしこの時制の表すところは、古典ラテン語の時期には単独の時制として区別することのできなかったアオリストの意味を専ら担うようになった。そして、複合過去という迂言的表現法によって、本来の完了の意味が表されることになり、少なくとも書き言葉においては時制の数がひとつ増えたことになる。ところが、この複合形という迂言的表現形態は、過去完了・未来完了の時制にも用いられることとなった。その結果、完了幹はもはや現れることはなく、完了分詞と助動詞による表現に取って代わられることになった。つまり直接法においては、単純過去形が唯一の完了幹を用いる時制となったのである。

次に接続法であるが、現在・過去・未来とすべての時制をそろえている直説法と異なり、未分化ではっきりしない状態にある法であると考えられている⁽⁴⁾。古典ラテン語でも、接続法完了は必ずしも完了を表すとは限らないし、接続法過去完了が未完了過去で表されるべき領域を犯すこともある。このようなこともあって、接続法完了はなくなり、接続法過去完了がそれに取って代わった。なぜ接続法完了が残らずに、接続法過去完了が残ったのかは、前者が直接法未来完了と酷似した活用をするからであろう。したがって、スペイン語において多少の例外はあるが、今日に残っているロマンス諸語の接続法半過去は、その名とは違って、ラテン語の接続法過去完了から変化してできたものである。そして、直説法においてアオリストと完了の区別が確立されたことと、迂言的表現による一連の完了の体系が整ったことなどにより、接続法においても、迂言的表現によって接続法大過去という、完了を表す方法が現れたのである。

これらはラテン語という総合的な言語から、分析的な言語であるロマンス語へ向かっての大きな変化の一環をなす変化である。しかしさらに、俗ラテン語からロマンス諸語へかけての時期に起こった音声変化にもその大きな原因があると考えられる。そのことは直説法の次のような例を見れば容易にわかる。すなわち、CANTAVERAM, CANTAVERO, CANTAVERIM などの活用形では、アクセントのない語末音節では殆ど聞き分けが不可能なほどに、音声変化が進んでいたものと見なされるからである。その結果、上の例では、直説法過去完了も直説法未来完了も接続法完了も音声の面では区別不可能になってしまうのである。それに加えて、以下で取り扱う -v- の脱落なども加わって、分析的な動詞体系の確立に進んで行ったのである。

以上のようなことから、ここで取り扱う完了幹をもつ時制とは、古典ラテン語の直説法完了と接続法過去完了であり、今日のロマンス語を代表してフランス語の文法用語で言えば、直説法単純過去と接続法半過去である。

II. 3. 古典ラテン語の -v-

上に見た4のタイプで完了幹を作る動詞の場合、既に古典期のラテン語において、直説法完了では、二人称単数と二人称複数と三人称複数においては、-v- が落ちた（さらに二人称単数と二人称複数においては母音縮約が行われた）短縮形が用いられることも珍しいことではなく、その結果 -v- を含む形と -v- を含まない形との両方が使用されていたことが知られている。このことは、例えば、古典期を代表する名文家キケローの書いたものにおいてさえも、両方の形態が見られることから⁽⁵⁾、少なくとも古典期のラテン語においては -v- を含む方が短縮形よりも文語的であり、短縮形の方がより口語的であるとは必ずしも言えなかったようだ。

(4) Väänänen, V. § 307

(5) Fouché, P. (1981) § 125

したがって、CANTARE の直説法完了の活用は以下になる。

CANTAVI
CATAVISTI
CANTAVIT
CANTAVIMUS
CANTAVISITIS, CANTASTIS
CANTAVERUNT, CANTARUNT

短縮形を部分的にもっているこのような動詞体系が、短縮形を用いなかった残りすべての人称においても短縮形をもつようになり、ついには -v- を含む体系は用いられなくなり、短縮形の体系のみが残って今日に至っていることが、今日のロマンス諸語を見ることによってわかる。

では、いつどのようにして、他の人称にもこの縮約形が広がって行ったのかについて考えなければならぬが、その前に、古典期にこれらの短い形が用いられるようになった経緯をまず概観したい。

II. 4. 半母音 [w] の音声学的特徴と ラテン語における脱落

まず最初に、-v- であらわされる半母音 [w] がどのような音声学的特徴をもっているのか、またラテン語の歴史の中でどのような変化をして来たかについて知る必要がある。この音は、音声学ではより正確に、両唇軟口蓋接近音と呼ばれる事から分かるように、唇の丸めと後舌面の軟口蓋への接近という二重調音により生成される音である。また、音声学で言う接近音というのは、無摩擦継続音と半母音を一緒にした呼称であるが、ラテン語の歴史においても、他の多くの言語における歴史的音声変化においても、この音は同じような変化の過程をたどることが多い。すなわち、円唇性を失って、ということは子音性を失って、音節の境界としての役割を失って消失してしまうのが第一の場合である。そして、二番目の可能性としては、接近の度合いを強めて、ということは子音性を増大させて、摩擦音化する変化である。後者の

場合においては、さらに調音点の接近の度合いを強めて、閉鎖音にまで変化することもある。

実際に、ラテン語における歴史を見ても、帝政期以降の俗ラテン語からロマンス諸語への、母音間にあるこの音の変化は、同器官的母音の前では消失、それ以外では摩擦音化している。以下、Niedermann の記述に従って見てみよう⁽⁶⁾。

PAVONE > paone > paon,
AVUNCULU > aunculu > oncle
LAVARE > lavare > laver,
NOVELLU > novellu > nouveau

前者の傾向は上の例の時期のみならず、ラテン語の歴史の中で普遍的なものである。古典時代以前のラテン語において、語頭を除く o の前の v は脱落する。

deivos > devos > deos > DEUS,
Gnaivos > Gnaios > GFNAEUS
(ただし語頭では, VOCO, VOLO, VORO...)

同じ傾向は、ずっと時代が新しい帝政期の碑文での誤用でも知ることができる。

FLAVUS > Flauius, SERVUS > serui
同様に、文法家プロブスの附則 Appendix Probi にも次のような指摘が見られる。

rivus non rius,
flavus non flaus,
avus non aus

同器官の子音が直前ではなく、近くにあるときでさえも、俗ラテン語では脱落していた例が碑文や今日に残っている地名などで見られる。

FAVILLA > failla
PAVIMENTUM > paimentum
NOVEMBER > noember
FAVENTIA > Faentia

同器官的母音の前ではない場合でも、同一母音に挟まれているときには上の例と同様、古典期以前から脱落していた。

DIVITIS > DITIS DIVITI > DITI

(6) Niedermann, M. § 57

oblivitus > OBLITUS SI VIS > SIS
この音声変化が第4変化の動詞、不定形が -ire の動詞の直説法完了における活用形に大きな影響を与えた。audio を例に見てみよう。

AUDIVI
AUDIVISTI, AUDISTI
AUDIVIT
AUDIVIMUS
AUDIVISTIS, AUDISTIS
AUDIVERUNT, AUDIERUNT

二人称単数と二人称複数においては、同一母音 i に挟まれて、短縮形ができています。三人称複数の場合は v の前後の母音が異なっているが、古典期以前には同一母音であったと考えられるので、他の二つと同じ音声変化によるものである。

audivisont > audiisont >
udiesont > AUDIERUNT

この変化に対しての Joly の解釈は、他の人称からの類推によるものだと述べているが、上のような理由から明らかに間違いである。

一人称単数、三人称単数、一人称複数とにおいて短縮形にならなかったのは、それぞれの短縮形が次のようになり、

audivi > audii > audi
audivit > audiit > audit
audivimus > audiimus > audimus

それぞれ、命令法現在二人称単数、直接法現在三人称単数、直説法現在一人称複数の活用形と同じになってしまっていて混同が起こるからだと言われる。しかしこれらの縮約形も散発的に韻文で現れている。

この変化がその後、類推により、既に見たように前後の母音が異なる -are の語尾をもつ動詞にも広まっていった。ちなみに Ernout によると、-are の語尾をもつ動詞にも短縮形が用いられるようになる前に、-ere の語尾をもつ動詞が先にこの変化を被ったと主張している。そして、俗語ではその後さらに、古典期には短縮形にならなかった人称においても、縮約が起こったのである。た

だし他のタイプの動詞とは異なり、-are のタイプの三人称単数形については、-ait, -aut, -at の三種類が確認されている。このことは、今日のロマンス諸語に至った活用形を見ればわかる。二番目のものはポンペイの壁面に残された資料などにも見られる。

EXMUCCAVIT > exmuccaut,
PEDICAVIT > pedicaud

したがって帝政期の俗ラテン語では、79 年のヴェスヴィオス火山爆発のころには少なくともこの地域においては、上記の二つの動詞の直説法完了形は次のようなものだったのである。

audii, audi audiimus, audimus
audisti audistis
audiit, audit audirunt

cantai cantamus
cantasti cantastis
cantait, cantaut, cantat cantarunt

II. 5. 歴史音声学的解釈

この音声変化については、Bourciez, Ernout, Niedermann, Fouché らの歴史言語学者の説明は細かい点は別にして、おおよそのところで一致している。そこで、Fouché の解釈について概観してみよう。

彼は最初の変化、すなわち二人称単数形、二人称複数形、三人称複数形における縮約形は、文学作品がラテン語で書かれる以前に逆上る時代からのものであると見なしている。古ラテン語やそれよりもっと前の時期のラテン語では、単語内における音節の構造によって決定される高低アクセントの他に、語頭に強いストレスアクセントが置かれていたため、語中音消失が生じたことによる変化だと説明する⁽⁷⁾。

càntavisti > càntavsti > càntasti >
cantàsti

(7) Fouché, P. (1973) p.633

cântavistis > cântavstis > cântastis >
cantâstis
cântaverunt > cântavrunt >
cântarunt > cantârunt

このように、まず次末音節の母音が脱落し、半母音の v が脱落して語中音消失が完成し、その後語頭の強いアクセントがなくなり、ピッチによるアクセントが音節構造によって規則的に次末音節に現れ、この変化が完成したというわけである。

本論で問題にしている第二の変化、すなわち一人称単数形、三人称単数形、一人称複数形においても短い活用形が用いられるようになった時期については、紀元前の古典ラテン語期だとしている。しかし、これらの人称においての短い形が、古典期の作品には殆ど現れないことについては、教育によるものだと言っている (langue de la 《société》)。それに対して、庶民の言葉では (langue populaire)、既に II.4 で見たようにこれらの変化の多くのものが見られることから、この時期の変化だと見る⁽⁸⁾。Väänänen も、明確にはこの変化の時期については述べていないが、民衆のラテン語においては全人称において短縮形が用いられていたと主張しているので、紀元前の変化であると考えていることは明らかである⁽⁹⁾。ところで、この時期について Joly は紀元後 2 世紀ごろだと言っているが⁽¹⁰⁾、この解釈は明らかに遅すぎることになる。一人称単数においての短縮形の可能性について Niedermann も言うように、音声においては既に発音されなくなったり別の音に変化してしまったりした音も、書かれた記録としては綴り字には相変わらず残っている場合が多いのである⁽¹¹⁾。また彼は民衆の言語においては、言語変化はさらにずっと進行している可能性も高いことを述べている。このことは、俗ラテン語のような言語を研究する際には重要な視点である。書かれた

資料に見られるのは、それが記録された時点では既に古いものが多いと見なければならないからである。

しかし、Fouché が他の多くの歴史音声学者の意見と異なるのは、一人称単数形においての変化で、*audivi* のように前後が同じ母音であるために縮約形になった *-ire* タイプの動詞からの類推によって、*cantavi* のような *-are* タイプの動詞においても縮約が起こったという考えには反対している点である。その理由として、圧倒的に数が多い *-are* タイプの動詞が、数が少ないタイプの動詞に形態を合わせることは考えにくいと指摘する。また、三人称単数形 *cantat* については、三人称複数形の *cantarunt* からの類推によって説明しているが、やはり、*cantaut* や *cantait* などの競合していた形態よりも広く使われたのは *audivit* などからの類推によってではないと説く。この点に関して非常に興味深いのは、さらに次のような解釈の可能性を指摘していることである。当時から既に定冠詞風な、あるいは不定冠詞風な用法が現れ始めていたと考えて、*cantaut unam*, *cantait illam* というような音環境で用いられる頻度がかかなり高かったと仮定していることである。このような場合には異化作用でそれぞれが、*cantat unam*, *cantat illam* のようになることはごく自然な音声変化であると考えている⁽¹²⁾。他の歴史言語学者は触れていないこのような捕らえ方は大いに興味のあるところである。本来は数詞や、指示代名詞であったものが、いつ頃冠詞としての用法が出て来たのかということは、音声変化とは全く無関係の別のものとも言えないだろう。しかし、この点については語彙論や統語論などの方面でのさらに詳しい検証が必要である。

II. 6. Matte の生理音声学的解釈

徹底して生理音声学的な態度をとってフランス語の歴史音声学の研究を発表した Matte は、直

(8) Fouché, P. (1981) § 125

(9) Väänänen, V. § 333

(10) Joly, G. (1998) p.179

(11) Niedermann, M. § 58

(12) Fouché, P. (1973) p.639

接には本論で扱っている音声変化については述べていない。しかし、ここで、本論で対象としている音声変化について、彼の理論によってはどのように解釈できるかを見えてみることは有意義なことである。彼の歴史音声学の解釈の特徴は、ある一つの音声変化のみを対象とするのではなく、ある言語の、ある時期における、他のいろいろな音声変化が、個別に独立して起こるのではなく、共通の生理音声学的条件の下に起こる可能性が高いことを主張している点である。すなわち Straka や Delattre らと同じアプローチのしかたで歴史音声学を研究している点である。

まず彼の理論の基礎にあるものを概観してみよう⁽¹³⁾。もちろん、最小努力の原則や、基層や上層の影響、構造主義言語学の主張する体系内の均衡不均衡の力なども、音声変化の重要な要素たりうる。しかし、全ての音声変化の基盤には、特定のある時期における、特定のある言語がもっている調音習慣というものがあるという事実を、彼は強調している。そして、最初はアクセント体系、リズム、イントネーションなどの超分節的なものから変化が起こり、最終的にはある音の完全な変化へと至るというものである。この調音習慣のことを *modes phonétiques* 音声学的（調音）様態と呼んでいる（彼は調音ということばは用いていないが、意図する所を考えて本稿では以下、調音様態と呼ぶ）。この言葉は彼の主張するように、G. Straka が用いる *effort articulatoire* とは異なる。Straka によると、子音は音声器官を閉鎖する方向への筋肉の作用により、母音は口腔を解放する方向への筋肉の作用によるとしている。この理論にしたがうと、例えば半広母音は狭母音より調音のためのエネルギーは大きいと考えることになる。それに対して Matte はあいまい母音シュワーの発音が音声器官にとって最もエネルギーを使わない位置であると考えるので、上の二種類の母音については解釈はまったく逆になる。

ここで、彼があげている調音様態の三つの重要要素をみてみよう⁽¹⁴⁾。

1：音声器官の緊張の度合いと調音部位間の力の配分

2：調音エネルギーの要素（音節、音節グループ、抑揚など）間での配分

3：音と音の間の相互作用と独立性

そして、これらに基づき四つの様態を区別する。

まず、減少様態（*le mode décroissant*）では、調音のための強い筋肉緊張と、逆に筋肉の弛緩とが交互に行われるのが特徴である。アクセントをもった強い音節や語頭の音節が、アクセントをもっていない弱い音節と交互に現れる。つまり、単語内や語群内において、ある音節が強いアクセントをもっているほど、アクセントをもっていない音節は逆に弱く発音されるという場合である。さらには音節内においても、音節頭部の子音に最もエネルギーが集中する。その結果起こる音声変化は、アクセントのある母音の二重母音化、内破子音の弱化、鼻子音を従える母音の鼻音化、アクセントのない母音の中舌化などである。減少という言葉を用いているのは、アクセントを受けない音や音節が調音のためのエネルギーを減少させることから来ている。

次に、弛緩様態（*le mode relâché*）は上の減少様態の到達点であり、調音器官がアクセントのある音節の出だしの子音において、より強い閉鎖を作るようになり、そのためにはそれらの調音器官の動きは、そうでない場合と比べて遅くなると考えられる。その結果起こる音声変化は、舌の上昇・前進・後退などの運動が小さくなることによる母音のさらなる中舌化から、さらには母音の脱落などである。円唇化や平唇化が弱まることも、これら母音の変化を促すものである。

増加様態（*le mode croissant*）では、調音のためのエネルギーは徐々に増加し、音節は母音で終わる傾向になる（開音節化）。つまり音節頭部に多

(13) Matte, E.J. p.46～

(14) Matte, E.J. p.59～

くの力を注ぐのではなく、段階的に増加させて行く。その結果、それぞれの音節は、語末音節や語群末音節以外においては均等に発音され、アクセントのない音節でも母音は弱化しない。

最後に、緊張様態 (le mode tendu) は、増加様態の到達点である。すべての音節のすべての子音と母音が均等に調音され、アクセントがあるなしにかかわらず、特定の音節や、ある特定の子音や母音が他の音を犠牲にして、強く調音されることがない状態である。したがって、子音や母音はしかるべく保たれ、閉鎖を作るためのみにエネルギーが使われることがないので、子音の弱化や母音の中舌化は起こらない。

以上の考え方をもとにしてラテン語の歴史を見ると、紀元1世紀の状態は緊張様態であったと彼は主張している。それが紀元後4世紀にかけて減少様態が優勢になる方向への変化が起こり、減少様態とその到達点である弛緩様態が7世紀にその頂点に達して、その後3世紀間にわたりこれらの様態が維持された。事実、古典期のラテン語の音節構造や、アクセント体系からはそのように考えてもよいだろう。その後、話し言葉のラテン語では、よく知られているように、高低アクセントから強弱アクセントへの変化が起こったわけであるが、そのことによって諸ロマンス語へかけての母音体系の根本的な変化が起こった。この事実が、彼の説明するところの減少様態に入ったことの結果であると彼は主張する。この時期を彼は紀元2世紀から4世紀の事だと見ている⁽¹⁵⁾。

さて、この理論に基づいて本論の問題を考えてみよう。-v- の脱落という減少は、彼の理論では明らかに減少様態のもたらす音声変化である。既に述べたように、この音が本来もっている音声学特徴からは、二つの可能性があるのに、摩擦音化せずに完全に脱落してしまったことからこのように判断してよいだろう。古典期のラテン語に既にあった -v- の脱落が他の人称にも広がって言った

時期は、学者により意見は異なるし、明確な時期を設定することは無理ではあるものの、おおよそ帝政期初期であると集約してもよいのではないだろうか。ところが、彼の主張は異なっていることになる。帝政期が始まる紀元1世紀の状態が、彼の言うように緊張様態であったと考えるのは、この場合妥当ではないように思う。なぜなら既に見たようにポンペイの資料では三人称単数において短縮形が確認されているからである。しかし、彼も言うように⁽¹⁶⁾、上述のアクセント体系の変化の兆しが既に共和制の時期に始まっていたすれば、この時期に減少様態の始まりもあったと彼自身見ているわけである。音声変化は多くの場合、非常に長い年月を必要とするものである。場合によっては世代を越えて完成されるものもある。このように考えると、本論で問題としている完了幹の -v- に関しては、音声学的にも脱落する傾向があり、ラテン語の歴史の中でも脱落する例が多く見られ、動詞の完了形の活用形の体系内でも既に半数の人称形で脱落したものが定着していた状況では、減少様態の萌芽の時期においてではあっても、この調音様態が多少の影響を与えて、他の人称にも短縮形が広がったと考えてもよいのではないか。もちろんこの減少様態という、百年から数世代にわたる音声変化の大きな傾向のみによってこの音声変化が起こったとは言いがたいだろうが、少なくとも一つの要素ではあるだろう。例えば、本論では扱わなかったが、次のような点も考えなければいけない。同じく完了幹を用いる接続法過去完了においても同様な変化が起こったわけであるが、接続法過去完了には必ず -ss- という音が現れることから、-v- の脱落する可能性ははるかに高かったのではないだろうか。そして、このことが完了幹全体においてこの音の脱落に有利に働いたのではないかと想像できる。

(15) Matte, E.J. p.65～

(16) Matte, E.J. p.68

III. 結論

古典期のラテン語においては限られた人称においてのみ見られた -v- の脱落が、ロマンス諸語へ変化する過程で、すべての人称においてみられるようになったことについて考えてきた。この変化が Matte の理論でどのように説明できるかについて考えたが、多くの問題を含んでいるとはいえ、音声の歴史的変化を解釈する方法として、彼が主張する減少様態という調音傾向を、ラテン語がもち始めたと考えられる時期に、この変化は普遍化したと見ても間違いではないだろうという結論に達した。Matte の主張によると、この時期のラテン語には、既に高低アクセントが強弱アクセントに変化する傾向が見られたと言う。このことは、彼の理論で減少様態の始まりが、既にこの時期に観察できることを意味する。もちろん変化の原因はひとつではない。特に類推によるものも大いにかかわっているだろう。さらに、接続法過去完了の活用との関係も考慮しなければいけない。本論では触れられなかったが、ロマンス語への変化の過程において迂言的な表現が生まれたことで、未来形や条件法が新しい活用体系として定着しつつあったことも無関係ではないだろう。また、音声学的な視点のみならず、Fouché のいうように冠詞の用法が生まれつつあったことなどとの関係もまた無視することはできない。

また、既に見たように、多くの研究者が、一人称複数形等において短縮形が現れないのは現在形や命令法との混同を避けるためであると説明しているが、残された書かれた資料をもとに判断すれば確かにそうであろうが、実際の話し言葉においては変化は思いもよらず進んでいる可能性が高いと考えるべきではないだろうか。残された言語資料を通じてしか判断できないことは多いが、俗ラテン語のような言語を研究する際には、この点を常に意識して考察を進めていくべきであろう。半数の人称において既に短縮形が頻繁に用いられている環境で、多少の混同の危険性はあっても、体

系としては全人称において短縮形が用いられていたと見ても不思議はないはずである。したがって、本論で問題にした変化も、共和制末期ごろには、俗ラテン語としては既に出現していたものと考えられる。もちろん、それが人称変化の体系のなかに定着して、さらには文字のうえに残されるようになるのは、ずっと時代が下ってのことではあるだろう。この意味からも、音声変化を考える際には、個別の音声変化のみを見ていては、正確な時期や原因を見落とす可能性があると考えられる。したがって、Matte のように、ある時期の、ある言語がもっている生理音声学的な傾向というものを設定することは、歴史音声学を研究するにおいて特に重要である。

bibliographie

- Andrieux, N. (1983) : Manuel du français du moyen âge, 3. systèmes morphologiques de l'ancien français, Sobodi.
- Bourciez, E. et J. (1967) : Phonétique française, étude historique, Klincksieck.
- Buridant, C. (2000) : Grammaire nouvelle de l'ancien français, Sedes.
- Chaussée, F. de la (1982) : Initiation à la phonétique historique de l'ancien français, Klincksieck.
- Chaussée, F. de la (1977) : Initiation à la morphologie historique de l'ancien français, Klincksieck.
- Ernout, A. (1974) : Morphologie historique du latin, Klincksieck.
- Fouché, P. (1973) : Phonétique historique du français, Klincksieck.
- Fouché, P. (1981) : Morphologie historique du français, le verbe, Klincksieck.
- Joly, G. (2003) : Précis de phonétique historique du français, Armand Colin.
- Joly, G. (1998) : Précis d'ancien français, Armand Colin.

- Matte, E.J. (1982) : Histoire des modes phonétiques du français
- Meillet, A. (1977) : Esquisse d'une histoire de la langue latine, Klincksieck.
- Niedermann, M. (1953) : Phonétique historique du latin, Klincksieck.
- Picoche, J. et Marchello-Nizia, C. (1994) : Histoire de la langue française, Nathan.
- Queffélec, A. et Bellon, R. (1995) : Linguistique médiévale, Armand Colin.
- Väänänen, V. (1981) : Introduction au latin vulgaire, Klincksieck.